

十返舎一九の化物系草双紙について

松山美加

一、はじめに

本論では、数多い十返舎一九の作品の中でも、化物が登場する黄表紙及び合巻を取り上げる。ここでは、見越入道やろくろ首、ももんがやや三つ目入道など、化物が登場する作品のことを、化物系草双紙と呼ぶことにする(注二)。扱う作品のほとんどは黄表紙だが、草双紙(注三)としたのは、黄表紙の他に、合巻も一つ扱ったためである。

一九の草双紙作品の中でも、取り分け化物系草双紙の研究は、ほとんど進んでいないのが現状である。加えて、翻刻された作品の数も少ない。先行研究の多くは、一九の草双紙作品全体を論じた中の一部であり、化物系草双紙について中心的に論じたものではないのだ。

化物系草双紙について多くの論文を發表しているのは、アダム・カバット氏である。彼は一九以外の化物系草双紙も研究し、いくつかを翻刻している。それでも、化物系草双紙の全体的な指摘が多く、一つの作品について詳しく論じているわけではない。たとえば、アダム・カバット氏は、一九の化物系草双紙について、次のよ

うな指摘をしている(注三)。

一九は黄表紙のユーモア精神を保ちながら、限られた読者のための内輪の穿ちではなく、一般的に受け入れられやすいユーモアを目指していた。この一九の意図は、黄表紙から大衆に受け入れやすい合巻への移行と直接につながるものということもできるだろう。また、一九自身は、この「とぼけた面白さ」から一生離れられなかったと言っても過言ではない。

一九の化物系草双紙について論じてはいるが、作品ごとの分析ではなく、網羅的な論にとどまっている。

このように、一九の化物系草双紙について、作品一つ一つの細かな研究はなされていないのだ。そこで本論では、一九の化物系草双紙について作品を詳しく検証し、一九の用いる笑いの手法を明らかにしていきたい。そのために、化物の親玉とされる、見越入道とももんがあとという化物に着目して論じる。それは、見越入道が化物系草双紙の中でも、とりわけ数多く登場するポピュラーな化物で、より特徴を検討しやすいと考えたからである。

アダム・カバット氏によると、「化物たちの親玉はだいたい「見越入道」あるいは「ももんがあ」(ももんがという表記もある)に決まっている(三つ目入道や大入道の場合もある)。(注四)のだからという。一九の化物系草双紙に関わらず、他作者の作品においても、見越入道とももんがあは、化物の親玉として描かれることが多いというのだ。確かに、両者が化物の親玉という位置に立っている作品はある。例えば、羽川珍重の赤本『是は御ぞんじはけ物にて御座候』(注五)が挙げられる。作中において、両者はそれぞれ「大将見越入道」「大将ももんぐわ」と表記されている。以上のことから、草双紙において、見越入道とももんがあが、化物の親玉という位置付けであることがわかる。

しかし、アダム・カバット氏が指摘するように、見越入道とももんがあを、ひと括りに親玉とみなしてよいのだろうか。そこで、一九が描く見越入道とももんがあに、それぞれ異なった役割がそなわっていないかを明らかにするため、一九の描く見越入道とももんがあの特徴を、親玉という観点に着目して探っていきたい。そこから、草双紙における一九の笑いの手法が明らかになるのではないだろうか。なお、ももんがあは、「ももんぐわ」「ももんぐはア」と表記されることもあれば、「ももんじい」と表記されることもある。本論では、便宜的に「ももんがあ」で統一することにする。

二、見越入道について

はじめに、一九の描く見越入道の特徴について検討していく。そのために、見越入道が登場する一九の作品、『化物見世開』(注六)『怪談深山桜』(注七)『化皮太鼓伝』(注八)の三作品を取り上げる。まずは、『化物見世開』における見越入道の特徴を探っていく。

『化物見世開』は、見越入道をはじめとする化物たちが、坂田金時・金平親子に退治され、箱根の先に引越すところからはじまる。伊豆の山奥に倒れかかったあばら屋を見つけ、そこに住むことを決める。そして、化物の登場時に出る生臭い風を発生させる装置を、商品として売り出すなど商売を始めて、見越入道はやがて大金持ちになる。地元の化物からも慕われる、化物の親玉となったのである。

化物たちが箱根の先へ引越す理由について、アダム・カバット氏は次のように述べている(注九)。

なぜ黄表紙の化物が「野暮」な存在に仕立てられたのか。その理由としては、「野暮」と化物は箱根から先¹、箱根からこっちに野暮と化物はいない²という諺が考えられる。「野暮」に匹敵された化物は箱根から先の西にはいるが、箱根の関所から関東には存在しないという意味。これは上方に対して、江戸っ子の自慢の言葉でもある。プライドの高い江戸っ子からみると、化物は文化的水準が低いものとして見なされているのである。

この諺からもわかるように、化物は野暮な存在として、江戸の

人々に認識されていた。例えば、鳥居清長の『化物箱根先』（注十）という作品では、この諺をテーマにして、野暮な化物が描かれている。しかし、本作品の見越入道はその点について、特に嘆いてはいない。自分が野暮な化物であるとは、認識していないのだ。なぜなら、見越入道は田舎の化物とは違い、文化を知っている都会の化物だからである。

例えば、箱根の先へ引越した見越入道が、「まづ宿無しでもつまるめへ」と述べる場面がある。「宿無し」には、「江戸時代、人別帳から除かれた者」（注十一）つまり「無宿者」という意味がある。見越入道は、引越してから第一に、「宿無し」にならないことを考えた。これは、人別帳にも載らない「無宿者」になることを避け、除け者になることを避けたためである、と考えることができるのである。

また、「さあ、これからは何ぞまた商売をせずばなるめへ。大勢遊んでいてはつまらねへもんだ」といって、商売のことについてあれこれと思索する。商売をしなければ、高い店賃も支払うことが出来ない上に、自分たちも大勢抱えている。そのため、見越入道は、親玉として現実的思考をめぐらす必要があるのである。

次に、生臭い風を発生させる轡を売る場面を見てみる。

化物の出るときには、生臭き風を吹かして出づるがお定まり也。しかれども、まだ心得ぬ化物は、生臭き風を吹かすこと知らず。まして田舎の似た山化物ども、さよふのことは知るはずはなし

化物が登場する際、必ず生臭い風を吹かせなければならない。しかし、田舎の化物にはそれができない、というのだ。

ここで注目するのは、「田舎の似た山化物」という言葉である。「似た山」とは、「似て非なるもの」のことであるが、「半可通、似非通人を卑しめていう語」（注十二）という意味もある。つまり、田舎の化物は半可通（通人を装う人）であるから、化物の常識は知らないだろう、と見越入道は考えるのである。ここからも、見越入道が都会の化物であることを自覚している、と判断することができる。しかし、この商売は結局失敗に終わる。

「いや、生臭い風を吹かして出るはよけれども、ひよつとだいの精進の日をも忘れて轡を用いまいものでもないから、これはいらぬものだ」と、買い手はなし。田舎の化物は、どふしでも正直也。

精進の日は、生臭い魚は禁忌であるから、轡は必要ないというのだ。中には「うろたへて買う者」もいるが、親玉としての見越入道の面目は立っていない。「田舎の似た山化物」たちは正直であるので、遠まわしに断ることも、誤魔化すこともできないのである。

この場面では、見越入道と田舎の化物という対比がなされている。見越入道は、自らを都会の化物と認識し、箱根に住む田舎の化物を、「似た山化物」と位置付けている。しかし、「化物の出るときには、生臭き風を吹かして出づるがお定まり也」という道理を知らぬ田舎の化物は、半可通というよりも、野暮と捉えるべきであろう。

野暮とは「世間知らず」「田舎くさいこと」「氣の利かぬこと」(注十三) という意味だから、田舎の化物の性格と一致する。そしてこの場合、半可通であるのは、見越入道だといえる。なぜなら、田舎の化物を「似た山化物」といつつも、自信のあった商売で大損をするという失態をさらしているからだ。読者から見れば、この見越入道こそが「似た山化物」だったのである。

また、見越入道が、「頭に力紙のある人には、かまわぬがよし」と少し及び腰な発言を漏らしている場面もある。「力紙」とは「力士のある人」とは、力士のことを指しているのである。田舎の化物に色々と教えはするものの、力士は相手にするなという、見越入道の氣の弱さが見て取れる。

以上、場面ごとに見越入道の特徴を見てきた。親玉の見越入道は、リーダーとしての自覚と威厳を持って将来を見据え、商売のことを考えている。その一方では、商売に失敗するといった一面を持ち合わせているのである。

また、自らを都会の化物と自覚し、田舎の化物を野暮としている。その一方で、弱腰な発言をするなど、読者から見れば半可通な振る舞いをする存在として描かれているのが、特徴であるとわかった。

では次に、一九の『怪談深山桜』に登場する見越入道について論じる。ここでは、一九以外の作品である、伊庭可笑の『化物一代記』(注十五)と比較しながら、一九の描く見越入道の特徴を探っていく。

たい。

『怪談深山桜』と『化物一代記』は、化物の間に生まれた人間の子が、何とかして化物の仲間になろうと努力する、という筋立てにおいて共通している。そこで、一九の描く見越入道の特徴を、話の筋が類似した他作者の作品と比較することで見出せるのではないかと考えた。

それではまず、一九の『怪談深山桜』のあらすじを紹介する。

ももんがあと幽霊の間に生まれた子どもは、玉のような人間の子であった。化物の子どもが人間であるというのは、外聞が悪い。そのため、ももんがは、子どもと妻の幽霊を家から追い出してしまった。子どもは桃太郎と名前をつけられ、母と暮らす。桃太郎は化物の仲間になるため色々と工夫をするが、どれも失敗してしまう。

一方、ろくろ首は、病氣のため首が引っ込んでしまっていた。医者勧めで花見に行くと、若者になった桃太郎と出会い、恋仲となる。

医者と五位鷹の計らいにより、桃太郎とろくろ首は、お互いを待ちぼうけするうちに待ち切れず、首が伸びてめでたく化物となる。桃太郎は見越入道となり、ももんがあの跡目を継ぐ。

見越入道の恋人ろくろ首は、坂田金平にさらわれてしまう。そこで見越入道は、白拍子に化けて、金平の家へ助けに行く。しかし、ろくろ首は死んでしまう。

化物たちは、何とかして金平を退治しようと相談する。そこで、金平の金棒を奪い取ることにするが、見越入道は逆に捕まってしまう。

金平の主、源頼光が化物を見たという。そこで金平は、捕えていた見越入道を頼光に見せ、見越入道は気に入られる。箱根よりこっちは住むな、と申しつけられ、見越入道たちは丹波の山奥に引っ越し、春を迎える。以上があらすじである。

では次に、『怪談深山桜』における、一九の描く見越入道の特徴を見ていく。見越入道ははじめ、桃太郎という名前で登場する。本論では便宜上、桃太郎という名前の場面でも、見越入道に統一して論じることにする。

まだ人間であったころの見越入道には、非常に弱々しい描写が多く見られる。それは、次の場面から読み取ることができる。

かの幽霊は尚もこの地に迷いゐて、一人の子を育て、名を桃太郎と付けけるに、成人のうへ、重き疱瘡をしければ、大痘痕の引摺りとなりけるに、人が見ても、化物のよふだと言ふゆへ、母親、大きに喜び、どぶぞ化物に仕立て、も、んぐはあの跡を継がせんと、それよりしよぼく雨の降る夜、かの桃太郎に竹の子笠を着せ、徳利と通いを持たせ、夜ふけて町中を歩かせるに、血気盛んのでやいに出合い、脅しかけて、かへつて大きにぶちのめされ、方々のいにて逃げ帰りける。

痘痕ができて皮膚が引き摺り、顔は化物に近づいた。そこで、母親の幽霊は見越入道に化物の格好をさせ（図1）、夜の町を歩かせた。しかし、見越入道は血気盛んな男たちによって、かえりうちにされてしまうのだ。「竹の子笠を着せ、徳利と通いを持たせ」とは、

〔四ウ—五オ〕



図1 『怪談深山桜』（アダム・カバット「化物尽の黄表紙の翻刻と考察（その三）—『信有奇怪会』・『怪談深山桜』の翻刻と注釈』『武蔵大学人文学会雑誌』第29巻第3・4号、1998年3月）

狸の格好をする、ということだ(注十六)。痘痕によって化物のような顔になり、狸の格好をしてもなお、見越入道は人間の男たちには敵わないのである。

このように、化物になる前の見越入道は、人間にもやられてしまうような、弱々しさを持っているのである。これらの特徴からは、親玉らしい威厳や力強さは読み取れない。それは、まだ完璧な化物になっていないからであろうか。

しかし、この弱々しさは、化物(見越入道)となったあとにも見ることが出来る。恋人のろくろ首が、坂田金平に生捕られたことを知った見越入道は、ろくろ首の父親、三つ目入道に次のようなことを述べる。

「さて、卑怯なるかたぐいかな、金平とて、常の人間也。何ぞ恐るゝ事あらんや、我一人にてこの役目受け取り申さん、ろくろ首つゝ、がなく召し連れて立ち帰り申べし」と、坊主頭を打ち振つて、太平茶をぞ申ける。

ろくろ首救出の役目を互いに譲り合う化物たちの中、見越入道が進み出てその役を買って出る。誰もが恐れる仕事を進んで引き受けらる姿は、化物の親玉らしい勇氣である。攫われた相手が恋人となれば、当然の行動であるかもしれない。だが「金平とて、常の人間也。何ぞ恐るゝ事あらんや」という台詞からは、見越入道の自信や威厳を読み取ることが出来るだろう。

しかし、「太平茶をぞ申ける」という言葉に注目すると、必ずしも

そうとはいいい切れない。なぜなら、「太平茶」とは「言いたい放題。大言壮語」(注十七)という意味があるからだ。「我一人にてこの役目受け取り申さん」と、単身金平の屋敷へ行くことを宣言するが、それも「太平茶」つまり大言壮語であった。金平の屋敷へ行く場面で「見越入道も太平茶は言つてみたが」とあるように、言葉と内心が裏腹であることから、見越入道の気の弱さが表れているといえる。

また、ろくろ首を助けることができず、金平から逃げて帰る場面でも、弱々しい見越入道が描かれている。

見越はすごとく逃げ帰り、三つ目入道へいゝわけさへも面目なく、大きにへこみたりけるに、三つ目入道はろくろ首の事を聞き、口惜しがり、見越を近寄せ、「化物の仲間でも親玉株ともてはやさるゝ見越入道、金平くらいにいじめられて逃げ帰りしは卑怯未練の振る舞い、仲間の手前も恥づかしきにあらずや、

ろくろ首の父親、三つ目入道から厳しい一言をもらい、見越入道はひたすら平身低頭するばかりである(図2)。化物仲間からも「見越殿さへ逃げて帰つたといふ事だが、三つ目殿は手柄だ」と、関心の的は三つ目入道へと移り、見越入道の評価は下がる一方だ。というのも、結局金平の首を捕つたのは、見越入道ではなく三つ目入道だったからだ(だがそれも、金平の首が偽物の首と知れてしまうのだが)。自分の化物や三つ目入道からは、「親玉株ともてはやさるゝ見越入道」というように、親玉として認識されていた見越入道



図2 『怪談深山桜』（アダム・カバット『江戸化物草紙』小学館、1999年2月）

も、金平の前では、弱々しい姿をさらすしかないのである。

このように、化物の親玉へと成長しても、弱々しい見越入道は読み取ることができるのである。

弱々しい一方で、正直であどけない一面を見せる場面もある。それは、ろくろ首を助けるため、見越入道が金平の叔母に化けて（注十八）金平の屋敷を尋ねる場面である。しかし、金平は「渡辺と違って、叔母をもった覚へなければ、不思議に思いながら、わざと入れて、もてなしける」のである。つまり、金平は見越入道の正体に薄々感つきながらも、わざと屋敷の中へ入れたのだ。しかし、見越入道は金平の思惑に気づかない。なぜなら、「化物は人間よりあどけなく正直な者」であるからだ。しまいには、金平の手下に「かぼちやの蔓でも踊るなら、旦那へ申上げてやるべい」とからかわれてしまう。「かぼちやの蔓」とは、当時流行した「かぼちや節」（注十九）の一節である。これに合わせて踊るのが「かぼちや節」（注十九）であり、それは「かぼちや節に合わせておどるこっけいな踊」（注二十）であった。ここから、見越入道がこの手下に笑われているとわかる。

このように、見越入道の特徴の二つ目として、正直で間の抜けた性格が挙げられる。人間である金平にさんざんな仕打ちを受ける弱々しさも、こうした正直で間抜けた性格であるゆえの結果ではないだろうか。それが、親玉という肩書とのギャップであり、滑稽性につながるのである。

以上、『怪談深山桜』における見越入道の特徴を二点挙げた。一つ

は、人間（金平）にやられてしまう弱々しさや、大言壮語をいう反面、内心では気を揉む小心者である点である。二つ目は、金平のわなを見抜けない正直で間抜けな性格をしているという点である。それでも化物仲間たちからは、親玉という認識をされていることも特徴であろう。

続いて、『化物一代記』で描かれる、伊庭可笑の描く見越入道について見ていく。見越入道ははじめ、見越の介という名前で登場する。これは、見越の介がのちに出家して見越入道という名前に改める、という経緯があるためだ。本論では便宜上、見越の介である場面でも、見越入道という名前で統一して論じていくことにする。

この作品の見越入道の特徴の一つは、真面目で優しい性格をしている、という点である。例えば、ろくろ首である妻、お六の出産の場面では、子供思いの見越入道が描かれている。薬を調合する医者
の隣で、見越入道は正座をして説明を聞いている（図3）。医者が薬について説明をする横で、見越入道は肩を縮めて恐縮している様子である。生まれてきた子どもが「玉のやうなる人間の男子」で「大きに驚く」見越入道であるが、薬を調合する医者をじっと見つめている。

また、産後の場面では、一人子守をする見越入道が見て取れる。

お六もほどなくて夜にめでたく祝ひ、夜ふければ、乳付け産女も休ませ、見越の介、たゞひとり夜伽して、薬なぞ煎じたりしが、



図3 『化物一代記』（アダム・カバット『大江戸化物細見』小学館、2000年2月）

お六も乳母もぐったりと疲れる中、見越入道一人だけが起きて子どもの面倒を見る。ここから、見越入道の子ども思いである性格が読み取れる。医者にいわれたとおりの薬を煎じ、真面目に子育てをしているのだ。

しかしその一方で、子どもを捨てたすぐあとに、雪女のお雪と不倫をするという浮気心も持っている。見越入道は、夢に現れた山のお告げに従い、人間として生まれた子どもを山に捨てる。次に挙げる場面は、見越入道が子どもを捨てたあとの場面である。

それより見越の介は山の神の御告げにて、女房へも得心させ、そうくわが子を抱き、山奥深く分け入、不憫ながら捨ておき、帰るさに雪しきりに降りきたりければ、不思議や、影のごとくさも美しき女、向かふより来たるゆへ、見越の介思ふよう、「化物仲間の狐・狸のわれを知らぬといふ事はあるまじ。いかなる女なりとも、われをたぶらかさんとは憎きやつ」と、だん／＼近寄り見れば、かねて化物仲間の若いものどもが評判せし箱入り娘の雪女なり。

見越はお雪と気がつくくと、長い首筋もとからぞつとするほど惚れ込み、何とぞ手に入んとあやなしける。

このように、子どもへの愛情を持ちながらも、箱入り娘の雪女と浮気をするという、相反する一面も持ち合わせているのだ。

以上、『化物一代記』における、見越入道の特徴を二点挙げた。一つ目は、妻や子ども思いの生真面目な性格であるという点である。

そして二つ目は、基本的には真面目だが、時には浮気もするという点である。しかし、化物の親玉という観点で見ると、親玉らしい描写は見られない。たとえば、自分の化物が慕うというような記述はあまりない。見越入道が出家し、化物の頭がいなくなったことで、「化物の風儀も悪く」なってしまうという記述からは、親玉としての統率力が窺えるだろう。また、馬頭という化物が、見越入道のことを「見越入道様」と表現する場面がある。しかし、これは息子の三つ目入道に対していった台詞である。つまり、親玉である見越入道に敬意を払ったのではなく、三つ目入道の父親だから「見越入道様」と敬意を払ったとも考えられる。よって、親玉として化物たちの上に立っていたとわかる場面は、先に述べた箇所くらいなのだ。

『化物一代記』と『怪談深山桜』の見越入道と比較検討し、特徴を探ってみた。一九の描く見越入道は、化物の親玉らしく進んで役目を引き受け、仲間からも認められている。しかしその反面、弱々しさや間抜けさといった、肩書と性格のギャップがあることに、滑稽性が表れている。対する伊庭可笑の『化物一代記』は、謡曲『鉢木』をはじめ、浄瑠璃作品などを横した場面が多く登場する。そうしたパロディが、滑稽性につながるのであり、性格のギャップなどは描かれていない。

このように、伊庭可笑の『化物一代記』の、地口やパロディによる滑稽さばかりではなく、性格から生じる笑いがある点に、一九の描く見越入道の特徴があるのではないかと考えられる。

では次に、一九作の合巻『化皮太鼓伝』における、見越入道の特徴を探ってきたい。『化皮太鼓伝』のあらすじは、次の通りである。

化物の親玉、見越入道の元へ、大塔の宮（注二二）と金毛九尾の狐（注二二）が現れる。二人は見越入道に、この世界を魔界にするため、名のある化物を諸国から集めてほしいと依頼する。見越入道は喜んで承知し、国中の豪傑な化物たちを呼び集める旅に出る。

一方場面は変わり、年若い魍魎とおちよぼん夫婦の話である。魍魎とおちよぼんは駆け落ちして箱根の先へ引越す。しかし、引越しの手伝いを頼んだ白だわしという化物に、おちよぼんが、かどわかされてしまう。魍魎は、しぶしぶおちよぼんと別れることにする。おちよぼんはこの事態に嘆き泣くが、そこへ大家のももんが아가仲裁に入る。ももんがは、白だわしが穴賃（店賃）を滞納している、という理由で白だわしを追い出し、おちよぼんを救う。ももんがは、おちよぼんを夫魍魎の元へ返そうとするが、魍魎はそれを拒む。仕方なくももんがが、おちよぼんを引き取るが、二人は深い仲となる。

のまわりという狐の娘と魍魎が結婚するという話を聞いた狸は、白だわしと策謀して狐の嫁入り行列を襲うが、見越入道によって阻止される。見越入道は、首謀者の狸と白だわしを許し、仲間を引き入れ、大塔の宮の大望を果たさんとする。

のまわり狐の家に、山彦という山賊の化物が泥棒に入った。のまわり狐の家宝である、白狐の玉が盗まれたことを聞いた見越入道

は、白狐の玉を取り返すため山彦と対決する。結果見越入道が圧勝するが、白狐の玉は見つからなかった。以上が、本論に関連する箇所のあらすじである。

本作品の見越入道には、弱々しい描写や気弱な性格は見られない。むしろ、どんな化物も敵わない豪傑として描かれている。例えばそれは、見越入道が山賊の化物、山彦と一戦を交えた場面で見て取れる。

のまわり狐の家では、息子が化けようの稽古始めをするというところで、宴会が催されていた。その隙をついて、山彦はのまわり狐の家へ盗みに入る。山彦という化物については、次のように描写されている。

こゝに安倍山の奥に住む山彦といふ化物は、数千年をふりたる桶の精にて、その身は黒く熊のごとく、力あくまでも強く、手下の化物大勢従へ、住み荒らせし古寺の、人も住まざる大寺をすみかとし、盗賊をなし、富貴なる家を見かけ、押し入り、財宝を奪ひ取りける。

このように、山彦は大勢の手下がいる豪傑の化物として描かれている。しかし、そのような強者でも、見越入道には敵わなかった。両者の戦いは、次のようなものであった。

入道たゞ一人安倍山にいたり、山彦の隠れ家へいたるに、手下の化物ども、入道を怪しみ、討ち取らんと取り巻くを入道ごととせず、鉄の棒を以つて片端より打ち倒しければ、かの山

彦大きに怒り、踊りいで、手頃の大木を根より引き抜き、打ち振りて、渡り合ふ。入道得たりと鉄の棒にて打ち合ひく、互ひに負け劣らず、火水となりて、争ひけるが、さすがの山彦、入道に敵対叶はず、打ち据へられける。

見越入道は、山彦が引き抜いた身の丈以上の大木を奪おうとして抱え、山彦と対決する(図4)。そして山彦はひれ伏して、「およそ此近国の化物ども、我に勝つ者なきに、聞き及びし見越入道殿、恐れ入たり。此上は御身の手下に従うべし」と、見越入道の強さを認めるのである。

このように、本作品の見越入道は、豪傑の山彦でさえも敵わない強さを持っているのである。また、見越入道が山彦を殺さずに助けたのは、「名ある化物どもを語らひ、味方となし」大塔の宮の大望を成就させるためである。激しい争いであっても、当初の目的を忘れない点からは、親玉としての責任感が読み取れる。

一方、見越入道自らが駕籠となる場面では、見立てによる視覚的な滑稽性が表現されている(図5)。駕籠の陸尺(注二十三)が逃げたしまい、駕籠を担ぐ者がいなくなってしまった。そこで、見越入道がその長い首を使い、駕籠を運ぶのである。見越入道の武器、鉄の棒を息杖(注二十四)にする点も、見越入道ならではの見立てである。そして見越入道は、「なんと俺は首の骨が強かるう。これく後棒、向かふに犬の糞があるから、踏みつけまいぞ。お駕籠の旦那へ、一人で駕籠は担いでも、御祝儀なら、二人前下さりませ」とい

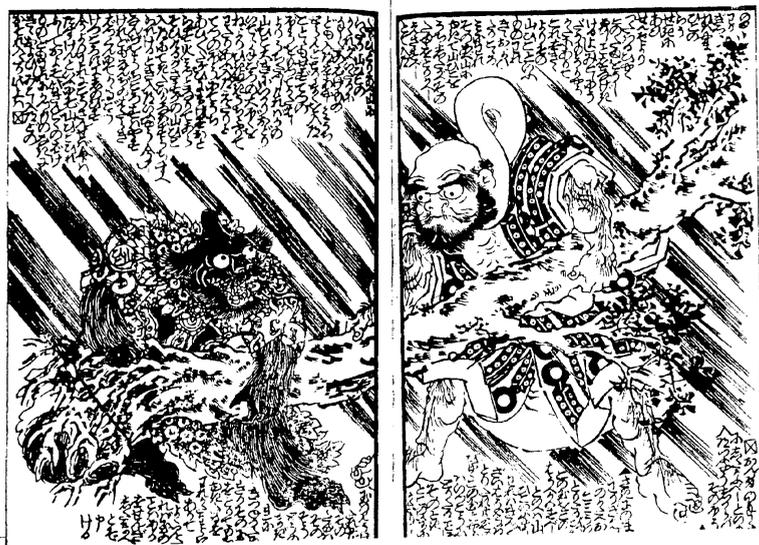


図4 『化皮太鼓伝』(アダム・カバット『江戸化物草紙』小学館、1999年2月)

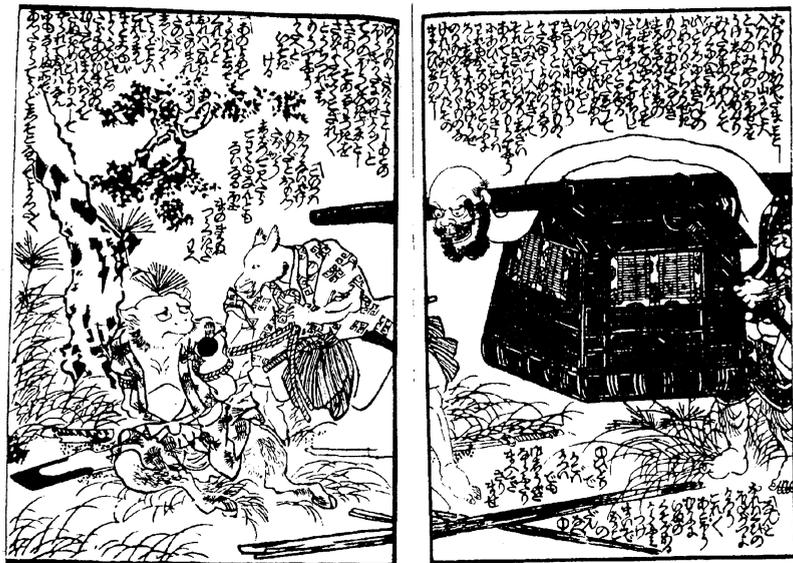


図5 『化皮太鼓伝』（アダム・カバット『江戸化物草紙』小学館、1999年2月）

う。通常、駕籠は二人で担ぐものである。しかし、見越入道はそれをたった一人でこなしてしまふ。一人で二人分の仕事をしているのだから、御祝儀も二人分欲しいというなど、親玉にしてはけちくさい発言である。あるいは、働いた分だけの賃金をもらおうという、金勘定にしっかりとした性格であるとも読み取れる。いずれにしても、見越入道のこの行動には、滑稽性が表現されているといえるだろう。

以上、『化皮太鼓伝』における見越入道の特徴を見てきた。その結果、見越入道が、化物の親玉としての強さや統率力を持っているということがわかった。その一方、自らを駕籠に見立てるといった、滑稽な描写が目立つということもわかった。

『化物見世聞』『怪談深山桜』『化皮太鼓伝』の三作品に登場する見越入道の特徴を見てきた。これらの作品に共通する特徴は、一人の化物の中に、二つの相反する性格を持たせていたり、多面的な性格を持たせている、ということである。親玉だが失敗をする、親玉だが弱々しい、親玉だが間が抜けているなど、肩書と性格にギャップがあるところに、滑稽性が表れている。このように、見越入道の性格の多面性を描くことが、一九の用いる笑いの手法であるといえるのではないだろうか。

三、ももんがあについて

次に、見越入道同様、『怪談深山桜』におけるももんがあの特徴を、伊庭可笑の『化物一代記』と比較しながら検討していく。

両作品のももんがあを比較してみると、見越入道の場合と違い、共通点が多い。例えば、どちらも見越入道に比べ、登場回数が少ない、という点が挙げられる。まず、『怪談深山桜』における、一九のももんがあを見ていく。『怪談深山桜』では、ももんがあは見越入道の父親として登場する。

丹波の国の山奥に住むももんがあは、幽霊と深い仲となり、幽霊は子どもを身ごもる。そして幽霊は無事子どもを出産したが、前述したように、生まれた子どもは「玉のやふなる人間の子」であった。化物の子どもが「満足なる子」であることは外聞が悪い。そこで、ももんがあは幽霊と子どもを追い出す。その後、見越入道となった息子に跡目を継がせたところで、ももんがあの出番は終わるのである。一方、伊庭可笑の『化物一代記』では、ももんがあは見越入道の息子、三つ道の育ての親として登場する。

こゝに又化物のうちにても心良からぬ悪者。お子様方も御存じのもゝんぐわといふ者、去んぬる頃、人間の子を拾ひ、六、七年度てゝ、山師どもと相談する。

見越入道の息子三つ道は、見越入道に捨てられてのち、ももんがあに拾われ育てられていた。しかし、山師の猫股に売られ、見世物

にされてしまうのだ。次にももんがあが登場するのは、三つ道が三つ目入道という化物になり、ももんがあと再会する場面である。ももんがあは、三つ目入道と久しぶりの会話を交わすのだが、これ以降の出番はない。

両作品ともに、ももんがあの登場回数は非常に少ない。しかし、一九の『怪談深山桜』には、伊庭可笑の『化物一代記』とは異なる特徴もある。それは、『怪談深山桜』のももんがあが「廃りもの」であることだ。それは、次に示す冒頭の場面からわかる。

こゝに丹波の国の山奥に、年久しく住みて、おりくは箱根からこつちへも顔出しをして、お子様方御存じのおじいあり。近年は廃りものにて、人に怖がられもせねども、又強いて何ぞ思いつきをして、怖がられやうでもなし、昔からのもゝんぐわあと名も改めず、ひそまり暮らしけるが、その頃、丹波の山奥に來たり住む幽霊あり。

「お子様方御存じのおじいあり」という描写は、『化物一代記』の「お子様方も御存じのもゝんぐわといふ者」と類似している。しかし、『怪談深山桜』はこのあと「近年は廃りものにて」と続いている点で、『化物一代記』と異なっている。

人に怖がられることもなくなったももんがあは、近頃では「廃りもの」となってしまう。「廃りもの」とは「役に立たぬ者」(注二五)という意味である。つまり、人に怖がられることも怖がられようともしない化物は、役に立たぬ者とされてしまう、ということだ。『化

物一代記』には、このような「廃りもの」という描写や表現は見当たらない。

ももんがあととは、当時流行していた言葉から生まれた化物である。ももんがあとについて、アダム・カバット氏は次のように述べている（注二十六）。

『是は御ぞんじばけ物にて御座候』という赤本の中に、ももんがあとは新しい化物の代表として古いタイプの化物と戦うが、黄表紙の時代になると、ももんがあとはもうそれほど流行り者でなくなっているのだろう。だからここでは、子供にもう怖がられない「廃りもの」として登場させていると推測できる。

この指摘のように、一九の時代にはもう、ももんがあとは流行の化物ではなくなったのだろうか。確かに、『化物一代記』（今昔化物親玉）と『怪談深山桜』（化物見越松）が刊行された間には、十六年の時間差がある。『怪談深山桜』が刊行されたところに、ももんがあとが流行遅れの化物となったため、『化物一代記』にはまだ「廃りもの」という表現が使われていなかった、と考えられる。

しかし、ももんがあとが「廃りもの」である理由は、単なる流行遅れの化物であったから、という理由だけではない可能性もある。そこで注目するのは、『怪談深山桜』が、ももんがあとの息子見越入道に跡目を継がせる、という内容であることだ。つまり、「廃りもの」であるために、跡目を息子に継がせたと考えられないだろうか。逆にいえば、化物の世代交代を描くために、ももんがあとは「廃りもの」で

ある必要があったのである。そして「廃りもの」であるために、『怪談深山桜』のももんがあとは、登場回数が少なかったのだといえる。そう考えると、ももんがあとは親玉というよりも、隠居という位置付けに近いといえる。

では次に、化物の親玉という観点に着目し特徴を見ていく。

『怪談深山桜』と『化物一代記』に共通している点の一つ目は、ももんがあとが化物の親玉である、という記述がないことである。『怪談深山桜』では「お子様方御存じのおじいあり」と記述されており、『化物一代記』では「お子様方も御存じのもんぐわといふ者」とある。化物の親玉と呼ばれているのは、どちらの作品でも見越入道であり、ももんがあとではないのである。

また、性格についても、見越入道のような親玉らしい描写は見当たらない。伊庭可笑の『化物一代記』のももんがあとは、「化物のうちにも心良からぬ悪者」とあるように、悪者として認識されている。実際、見越入道の息子を三十両で買うという山師の猫股に、「あゝ、安いものだ。売つておけく、しゃんく」といって、結局三十五両で売ってしまう。七年も育てた子どもを、あっさり見世物に売り飛ばしてしまう行為からは、非道な一面が窺える。この作品で跡目を継がせるのは見越入道であり、ももんがあとは単なる育ての親にすぎない。つまり、化物の親玉という描写は見られないのだ。「廃りもの」という表記はにせよ、化物の親玉として活躍する場面はないのである。

一方、一九の『怪談深山桜』でも、親玉らしい描写はない。確かに、最後は息子の見越入道に跡目を譲っている。

久しぶりにて父のも、んぐはあに会いければ、も、んぐわあ、大きに喜び、われ、かりそめの疑いより、母親ともに、年月苦勞をさせしこと、不憫也。かゝる生い先を見る上は、わが跡式譲り与ふべしと、化けようの伝授をことごとく教へ、ゆく末長く榮へける。

しかし、その「化けようの伝授」は「化物の草紙といへば、とかくお子様方がごひいきになされて下さるから、お子様方へは構わぬがよい。そして生酔いを脅すと、素破抜きをするから、気をつけたがい。とかく人間ほど怖いものはねへよ」というなど、弱腰な発言をしている。このように、弱腰な発言をするなど、親玉らしい威敵はないのだ。こうした性格からは、親玉らしい威敵などは窺うことができない。そして伊庭可笑の『化物一代記』と違うのは、一九の『怪談深山桜』のもんがあには、弱腰な発言をするといった、滑稽性があるという点である。

それでは、一九の描く『怪談深山桜』の見越入道ともんがあには、それぞれどのような違いがあるのだろうか。見越入道は、化物仲間から親玉と認識されている。しかし、もんがあにはそうした記述や描写はない。それは、もんがあが「廢りもの」であるためとも考えられるが、はじめからもんがあには親玉という性格はなかったのではないかと考えられる。なぜならば、もんがあが登

場した冒頭部では、「お子様方御存じのおじいあり」と紹介されているからだ。もしも、もんがあが親玉であったのなら、このような表現はしないのではないだろうか。あくまでも、昔から丹波の国の山奥に住む化物、隠居という位置付けなのだと考えられる。かつては「もんがあ」といって人を脅かしていたが、それも近頃はなくなってしまうた。そのため「廢りもの」となり、息子に跡目を譲る。かつては親玉であったのかも知れないが、それは本文からは読み取れない。少なくとも、この作品において、見越入道は親玉として描かれ、もんがあは親玉としては描かれていないとわかる。

また見越入道には、ろくろ首が金平に攫われ「我が一分立たず」と外聞を気にする性格がある。この点と、もんがあが、人間として生まれたわが子を、「化物の子がかゝる満足なる顔つきにては、外聞も悪し」といって追い出すように、体面を気にかける点と共通している。

しかし、外聞を気にする点について、見越入道ともんがあは大きく異なっている。それは、恋人や家族に対してもった行動の違いである。見越入道は、「もしや金平がわがまゝ、八百を言つて、圧状疎にして、ろくろ首を慰み者にする事も知れず」と思い、そうなれば外聞が悪いと気を揉んでいる。しかし、それでも豪傑の金平の屋敷へ乗り込み、恋人のろくろ首を助けに行くのである。外聞を気にはしても、恋人のために体を張って行動する点は、見越入道にしかない特徴である。一方のもんがあは、外聞が悪いという理由で家族

を家から追い出してしまふ。

もんがあは、つく／＼と考へみるに、腹は借り物。幽霊はもとが人間なればとて、種はまさしく化物の種なり。なんぞや人間の子を産む事あらんや。よく／＼考へみるに、この幽霊娑婆にありし時、人間の種を宿して死んだるゆへ、罪障深く、浮かむ事なりがたく、宙にぶらりと迷いぬながら、腹のうちの厄介ものをわれにおつかぶせしと見えたり。それゆへ、人間の子を生みしに極まりたりとぶつくさ言／＼出し、ついに幽霊に暇をやり、人間のがきなれば、連れてゆけとむりやりに追い出してやりける。

子どもが人間であつたのは、幽霊が人間の種を宿したまま死んだためであり、それを自分に押しつけたのだ、というのである。「不憫でならぬ」といつつも、責任を妻の幽霊に押しつけるという行動は、見越入道のとつた行動と対照的である。結局子どもと妻を追い出すことで、ももんがあの体面は保たれた。外聞を気にして非道な行動をとるか否か、ここが、見越入道とももんがあの異なる点である。逆にいえば、こうした性格の差異があるからこそ、親玉の見越入道がより強調されるのではないだろうか。赤本時代には、新しい化物として描かれていたももんがであつたが、一九の時代になると、それも流行遅れとなつてしまつた。しかし、一九は単にももんがをあを流行遅れの化物として描いたわけではなかつた。化物の親玉である、見越入道の性格と差異をつけるために、親玉ではなく、隠

居という役割をももんがあに与えたのである。

それでは次に、『化皮太鼓伝』におけるももんがあの特徴を見ていく。

ももんがあは、白だわしが住んでいる穴の大家(穴主)として登場する。「穴主のもんぢいは巻族も大勢使ひて相応の暮らし」であるが、親玉であるという記述はない。手下は大勢持っているが、親玉ではないのだとこからわかる。また、ももんがあは「わけよき者」である。「わけよき者」とは「人情に通じていて、ものわかりのよい人」(注二十七)のことである。それは、次のような場面からも読み取ることができる。

泣き入るおちよぼんを無体の仕方に、隣の穴、向かふの穴の化物ども、此物音を聞きつけ、何ごとやらんと駆けつけ来たるに、この穴主もんぢいといふ者来たり、白だわしを宥めて、委細を聞くに、おちよぼんだん／＼の次第を語れば、穴主もんぢい聞きて、「それは白だわしの不屈き也。ろくに穴貫も寄こさぬくせに、さやうの不埒者、我が穴には置かれず。早々穴立てを言ひつける。又その女は我引取り、もとへ帰しやるべし」とて、おちよぼんを引立て、いで去りける。

おちよぼんに横恋慕した白だわしは、夫の魍魎を騙し、おちよぼんを自分のものとする。しかし、それを知つた穴主のももんがあは、白だわしを穴立て(注二十八)するのだ。そしておちよぼんをももんがあが引き取り、夫の魍魎の元へ返そうとするのである。もも

んがあは、白だわしに言い寄られて嫌がるおちよぼんを見て、「白だわしめがああ婦人をちよるまかさうとするが、何としてく」といつて、おちよぼんを助けようとする。ここから、ももんがああ世話好きな性格が読み取れる。

おちよぼんの夫魍魎は、結局おちよぼんを引き取りはしなかった。「いつたん世間の取り沙汰にもなりしこと、我が耳へ入りしこともあれば、今さら帰すも外聞悪し」というのが、魍魎の言い分である。嘘とはいえ、おちよぼんが白だわしと密通した、という噂が一度世間に流れてしまった。だから、おちよぼんをもう一度家に入れることはできない、というのだ。この対応におちよぼんは死を覚悟するが、ももんがああ彼女を不憫に思い、「此上はそなたの身上、われらいかにも力を添へて世話すべし」と決めるのである。男女の仲裁のみならず、行き場のないおちよぼんを引き取る行為は、まさに「わけよき者」を表しているのではないだろうか。このように、ももんがああとても世話好きな性格として描かれていることがわかる。

またその一方で、ももんがああの下心が見て取れる場面もある。それは、白だわしに言い寄られ、おちよぼんが嫌がっているところをももんがああが目撃した場面である。「わしは年を取つてゐるだけ床が上手だから、それはく貴様の心持を土竜にしてやることだが、どふだく」と無理やり迫る白だわしに、ももんがああは次のような台詞をいつている。「何なら白だわし、脇へ退かつしやい。後へ俺

が当たつてみよう。俺なら、さだめて承知しそふなものだ」とは、おちよぼんを自分に任せろ、という意味であろうか。また、魍魎に捨てられたおちよぼんを引き取つたももんがああは、おちよぼんを見て次のようなことを思いつている。

この化物の世界にては女も綺麗に美しきを嫌ひ、とかく目は皿のごとく、口も耳まで裂けて、恐ろしくうそ気味悪く異風なる顔つきをよい女と好もしがる習ひにて、このおちよぼん、眼鏡のごとく、口は耳の際まで裂けて、二目とも見られぬ顔つき。も、んぢい、つねに見れば見るほど、さても好いた顔と思ふより心迷ひ、口説きかけてみるに、女も世話になるも、んぢいのことゆゑ、つひになびきて、深き伸とぞなりける。

引き取つたおちよぼんを見れば見るほど、自分好みの顔つきをしている。そしてついに、二人は深い仲となるのだ。「わしは白だわしの穴主だから、これから又貴様の穴主になりものさ」というように、ももんがああは単なる世話好きではなかつたのである。おちよぼんも、「わたしのやうな者でもかへ」と、まんざらでもない様子だ。「わけよき者」には「人情に通じていて、ものわかりのよい人」の他に、「恋情をよく解する人。色の道をわきまえている人。粹人」(注二十九)という意味もある。おちよぼんを口説き落としたというだけで、「色の道をわきまえている人」と解するのは難しいかもしれない。しかし、少なくとも、ももんがああがただ人情にあつい性格をしている化物ではない、と読み取ることができらるだろう。

以上、『化皮太鼓伝』におけるももんがあの特徴を見てきた。その結果、手下はいるが、ももんがあは親玉としては描かれていないことがわかった。また、世話好きであり、女性を口説くという一面もあることがわかった。

『怪談深山桜』と『化皮太鼓伝』どちらの作品のももんがあも、親玉であるという記述はない。『怪談深山桜』のももんがあは、「廃りもの」であるというように、隠居のような位置で描かれているのである。『化皮太鼓伝』に「廃りもの」という記述は見当たらないが、ももんがあの住んでいる場所が「箱根の先」であることや、「人里離れし山中」であることから、隠居という位置が窺えるだろう。今回は取り上げなかったが、一九作の合巻『化物の姫入』（注三十）にも、ももんがあが登場する。『化物の姫入』では、ももんがあのことを「こゝに、ぐつと普々、お子達は御存じのもんじい」と表現している。ここから、一九がももんがあを古い化物として扱っていることがわかるのだ（注三十一）。

四、まとめ

以上、一九の描く見越入道とももんがあの特徴について検討してみた。

まず、見越入道について、『化物見世聞』の見越入道は、親玉としての責任感を持ち、店の見立てや商売について考える。しかし、そ

の商売も失敗をしまつたといった一面もあることがわかった。また、田舎の化物を野暮と見る一方で、見越入道自身が半可通な振る舞いをしていることもわかった。『怪談深山桜』の見越入道は、親玉らしい勇気を見せつつも、太平楽をいう気の弱さや、外聞を気にするといった性格があるとわかった。また、こうした性格の多面性による滑稽な描写は、伊庭可笑の『化物一代記』にはない特徴であった。『化皮太鼓伝』の見越入道は、強くて真面目な親玉として描かれる一方で、見立てによる滑稽な描写が見られた。

一方ももんがあについて、『怪談深山桜』のももんがあは、親玉という記述はなく、「廃りもの」というように、隠居の立場で描かれていることがわかった。また、外聞を気にする点について、そのあとにとつた行動が、見越入道とは異なっていた。見越入道は、外聞を気にしつつも、恋人であるろくろ首を救うために、豪傑の金平の屋敷へと向かう。しかし、ももんがあは、外聞を気にして非道な行動をとるといふ点で、見越入道とは異なっている。また、『化皮太鼓伝』のももんがあにも、親玉という描写はなく、箱根の先に住む世話好きの化物として描かれているとわかった。それと同時に、女を口説くという下心も持っていることがわかった。

このように、化物の親玉とされる見越入道とももんがあには、大きな相違点があるのである。アダム・カバット氏が「化物たちの親玉はだいたい「見越入道」あるいは「ももんがあ」に決まっている」と指摘するように、ももんがあが化物の親玉であるとはいえない。

見越人道は化物の親玉であるが、ももんがあは「磨りもの」というように、古臭い化物、隠居のような位置で描かれている化物であるのだ。このように、一九は化物の特徴を、意識的に描き分けしているようなのである。また、見越人道は、親玉だが弱々しい、親玉だが間が抜けている、というように、一人の中に相反する二つの性格を持っていることがわかった。ももんがあについても同じようなことがいえる。子どもを捨てるという非道な行為をする一方で、弱気な発言を漏らしたりするといった性格のギャップ、あるいは、世話好きでありつつ下心もあるといった、性格の多面性が描かれている。このように、一九の化物系草双紙は、伊庭可笑の『化物一代記』のような、謡曲や浄瑠璃のパロディ、あるいは地口による滑稽性だけを描いたのではないということがわかる。すなわち、登場人物の性格の落差や多面性による笑いに、一九の描く化物系草双紙の特徴があるのである。そして一九は、こうした笑いの手法を、一つの作品に限らず、複数の作品においても使っていたようだ。

作品を一つ一つ見ていくことで、一九が化物系草双紙で用いる笑いの手法を見出すことができた。今後の課題は、今回取り上げなかった一九の化物系草双紙、及び化物系草双紙とは異なる擬人化作品の特徴についても、同様に検討していくことである。擬人化とは、「人間でないものを、人間になぞらえて扱うこと」（注三十二）である。一九の作品の中にも、器物や所帯道具が擬人化された作品がある。しかし、化物系草双紙とは特徴が異なっており、両者を比較検

討する必要があるだろう。また、今回は化物系草双紙に入れなかった、狐や狸といった動物のみが登場する作品について検討すること、も必要だろう。そして、一九以外の化物系草双紙と比較することで、より一九の描く化物系草双紙の特徴が明らかになることであろう。

注

注一

人間や他の動物に化ける力がある、狐や狸などのみが登場する作品については、作品数を把握しきれないため、今回は化物系草双紙の定義から外した。あくまで、見越人道やろくろ首など、固有の名称がついているもの、または、名称はないが人間とは明らかにかけ離れている姿をしているものや、文中に化物と書かれてあるものを、化物と定義する。なお、化物系草双紙という呼称については、アダム・カバット氏は「化物尽くし」と呼び、中村幸彦氏などは「化物草紙」と呼んでいる。本論では、化物系草双紙という呼称で統一する。

注二

草双紙とは、「江戸時代中期から後期（一七世紀末～一九世紀）に関東の江戸という都市で刊行された絵本文徒の版本をいう。広くは、赤本、黒本・青本、黄表紙、合巻の名称で呼ばれ、明治前期に及ぶ文芸の総称」（叢の会編『草双紙事典』東京堂出版、二〇〇六年八月、p1）である。

注三

アダム・カバット「十返舎一九の『化物尽くし』」黄表紙

から合巻へ」〔特集〕戯作の時代1〕(『江戸文学』第十九巻、一九九八年八月、p.50-51)。

注四 アダム・カバット『ももんが対見越入道 江戸の化物たち』(講談社、二〇〇六年十一月、p.48)。

注五 羽川珍重画、赤本、刊年未詳、東京都立中央図書館加賀文庫蔵(参考 注二に同じ)。

注六 本作品は、『国書総目録』に「化物見世聞まじりまゐり」二巻

(類)黄表紙(著)十偏舎一九作・画(寛政九一一刊(版国会・京大)〔化物見世出〕日比谷加賀)とあるが、今回は東京都立中央図書館加賀文庫所蔵のものを底本として使用した。

注七 十返舎一九作画、黄表紙。寛政九年(一七九七)以降の刊

行か。アダム・カバット氏によると、「寛政九年刊の『化物見越松』と寛政八年刊の『信有奇怪会』を合成した上で、新しい五巻目を付け加えたのである。そして話がスムーズになるため、繋ぎ目になっている十一丁オモテと二十丁ウラの二つの半丁(元は『信有奇怪会』の一丁オモテと十丁ウラ)を新しくした」(『化物尽の黄表紙の翻刻と考察(その三)』『信有奇怪会』・『怪談深山桜』の翻刻と註釈)『武蔵大学人文学会雑誌』第二十九巻第三・四号、一九九八年三月、p.89)のだという。なお、本文の引用は、アダム・カバット『江戸化物草紙』(小学館、一九九九年二月)と「化物尽の黄表紙の翻刻と考察(その三)」『信有奇怪会』・『怪談深山桜』の翻刻と

註釈、「化物尽の黄表紙の翻刻と考察(その1)」『今昔化物親玉』・『化物見越松』の翻刻と註釈(『武蔵大学人文学会雑誌』第二十八巻一号、一九九六年九月)による。また、読みやすさを考慮して、適宜濁点を補った。

注八 歌川国芳画、合巻、天保四年(一八三三)刊、国立国会図書館蔵。本作品は、話が途中で終わっており、未完のままとなっている。巻末に次回作の広告が掲載されているが、その存在は確認されていない(参考 アダム・カバット『江戸化物草紙』小学館、一九九九年二月。また、本文の引用も同書による)。

注九 アダム・カバット「箱根の先」という異界―黄表紙における化物像(特集 近世―異界―への憧憬)(『日本文学』第五十巻第十号、二〇〇一年十月、p.36)。

注十 鳥居清長画、安永七年(一七七八)刊、黄表紙、東京都立中央図書館加賀文庫蔵。「箱根からこつちに野暮と化物はなし」と、とんとなきものにしてあれば、化物仲間、残念に思ひ、これまであり来たりにては面白くなし。新しき化けやふを始めんと、化物の親玉ども、相談する」という冒頭からはじまり、化物たちは江戸へ向かう。しかし、逆に人間に化かされ、化物たちは西の海へと引越す、という落ちである(参考 アダム・カバット『江戸滑稽化物尽くし』講談社、二〇〇三年三月、選書メチエ26)。

〇〇三年三月、選書メチエ26)。

注十一

『角川古語大辞典』（角川書店）。また、「無宿者」については、笹間良彦『絵解き 江戸っ子語大辞典』（遊子館、二〇〇三年十二月）を参照した。

注十二

『角川古語大辞典』（角川書店）。

注十三

前野勇編『江戸語大辞典』（講談社、一九七四年十一月）。

注十四

『日本国語大辞典』（第二版、小学館）。

注十五

鳥居清長画、黄表紙。『化物一代記』は、同作画者による『今昔化物親玉』（安永八年（一七七九）か九年（一七八〇）刊）とその続編『化物世櫃鉢木』（天明元年（一七八二）刊）との合成本である。合成本の刊年は不明。本論では便宜上、この二作品を合わせて『化物一代記』と表記する（参考 アダム・カバット『大江戸化物細見』小学館、二〇〇〇年二月。なお、本文の引用も同書による）。

注十六

アダム・カバット氏によると、「竹の子笠をかぶり、貧乏徳利を持ちながら、使いをするのは狸の化物のひとつの典型的な姿である」のだという（参考「化物尽の黄表紙の翻刻と考察（その1）」『今昔化物親玉』・『化物見越松』の翻刻と註釈『武蔵大学人文学会雑誌』第二十八巻第三号、一九九七年三月、p.166）。『怪談深山桜』の場面でも、男の一人が「狸の金玉八畳敷と言ふから、引き延ばして煙草入れにでもするがいゝ」と述べていることから、見越入道は狸の格好をしていると推測できる。

注十七

注十三に同じ。

注十八

見越入道は「茨木童子が渡辺の叔母と化けて、綱を騙して、腕を取り返したることを」思い出す。これは、源頼光の四天王の一人、渡辺綱が、大江山に住む鬼茨木童子の腕を切ったが、茨木童子は綱の叔母に化けて腕を取り返したという話を模したものである。ここでいう「叔母に化けて」とは、「長い首を二つに曲げて、面を被り、人間の形にしらへける」というように、変装することを意味している。

注十九

「かぼちゃ節」とは「宝暦二年の頃よりの流行唄。吉原京町一丁目の妓楼大文字屋主人市兵衛は頭南瓜に似て大きく背が低かったので、地廻りたちがそれを笑って唄い出したものという。替唄多く、またこれに合わせておどる踊りをかぼちゃ踊りといい、唄・踊共に直ぐさま上方に伝わった」（注十三に同じ）。

注二十

注十三に同じ。

注二十一

「大塔の宮」とは、後醍醐天皇の第一皇子、護良親王のことである。元弘の乱に近畿諸大寺の僧兵を率いて活躍した。しかし、足利尊氏と反目、謀反人として捕えられ鎌倉に護送され、中先代の乱の渦中に殺された（参考注十四に同じ）。

注二十二

「金毛九尾の狐」とは、「体毛が金色で、尻尾が九本ある妖狐の様相。天竺では花陽夫人、シナでは殷の妲己、

日本では玉藻前となり、那須が原で射殺された三國伝来の悪狐である」(注十二に同じ)。

注二十三 「陸尺」とは「貴人の駕籠を担ぐ人足」(注十二に同じ)のことである。

注二十四 「息杖」とは「駕籠かきなどが持つ杖。普通の杖より長く、立ち止まって息をつくとき、その荷物を支えるのに使う」(注十二に同じ)ものである。この場面では、見越入道の持つ鉄の棒を、息杖の代わりにしている。

注二十五 注十三に同じ。

注二十六 注七「化物尽の黄表紙の翻刻と考察(その1)——『今昔化物親玉』・『化物見越松』の翻刻と註釈」(p.163)。

注二十七 注十三に同じ。

注二十八 「穴立て」とは「店立て」のことをいう。ここでは店は穴なのでこうもじった。「店立て」とは、「借家から追立てること」(注十二に同じ)。

注二十九 注十三に同じ。

注三十 勝川春英画、合巻、文化四年(一八〇七)刊、東北大学附属図書館狩野文庫蔵(参考 注八に同じ)。

注三十一 一九以外のものもんが画像については、伊庭可笑の『化物一代記』しか考察できていない。この作品のものもんがは、「廃りもの」であるという記述はなく、また一九のような性格の描き分けをしているわけではないようだ。今

注三十二 後、他の作者のものもんが画像を検討していく必要がある。
注十四に同じ。
〈まつやまみか／＼二〇〇九年日本語・日本文学科卒〉

第八十号 目次 二〇〇九年 三月

〈源氏物語小特集〉

『源氏物語』における字音語 紫上の場合—— 漆崎 正人

六条院・三条宮物語における継子・二人妻譚と『平中』引用

——雲居の雁・玉鬘をめぐって—— 小山 清文

後宮―封じられた嫉妬― …… 丸山 隆司

『藤篋冊子』源氏物語和歌注釈稿(上) …… 山本 綏子

* * * * * 内田百閒「サラサーテの盤」論

——モグニティ・知覚・主体—— …… 山田 桃子

花田清輝ルネッサンスにむけて

—— 生誕一〇〇年 …… 菅本 康之